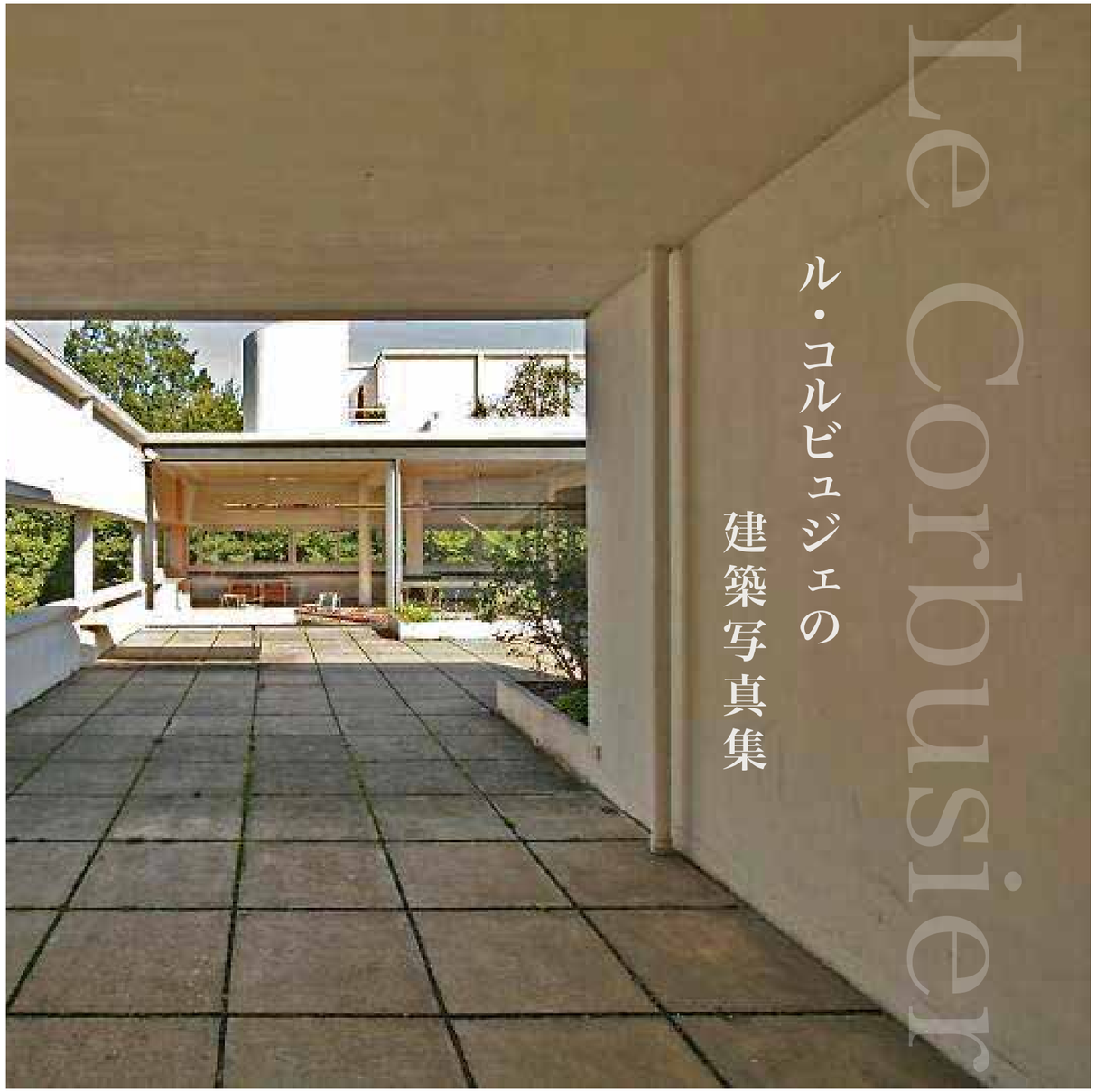
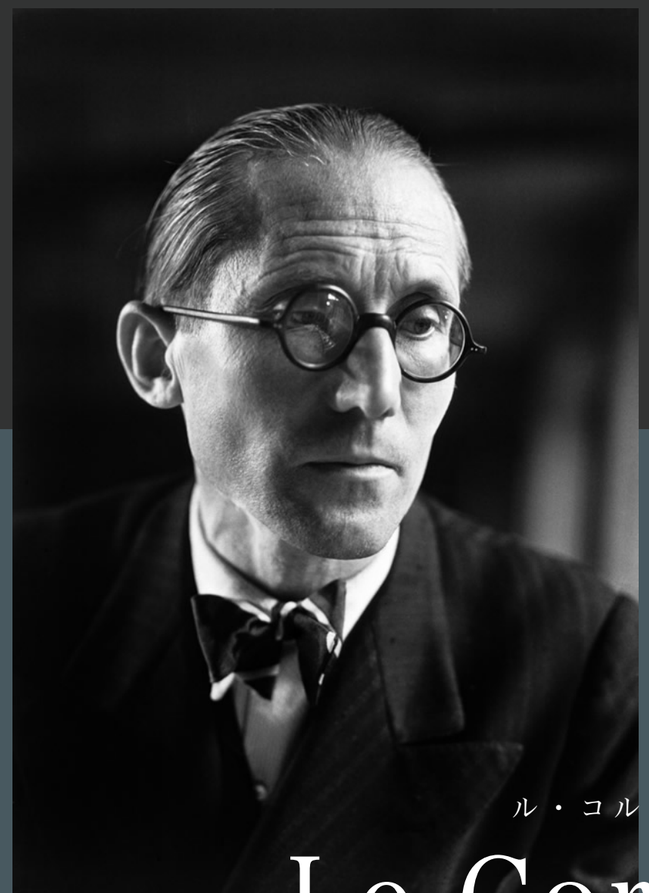


Le Corbusier

ル・コルビュジェの建築写真集

ル・コルヴュジェの建築写真集

5 985362049567



ル・コルビュジエ

Le Corbusier

伝統に縛られないモダニズムの旗手
ル・コルビュジェ。
生涯にわたり新しい建築の考え方を
世に送り出した。

ル・コルビュジエはスイスで生まれ、フランスで主に活躍した建築家である。フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエと共に「近代建築の三大巨匠」として位置づけられています。

ル・コルビュジエはスイスで活動した後にパリに出て、キュビズムの画家として活動しながら、三十五歳で従兄弟のピエールと共同で建築事務所を設立します。1920年代には「新しい建築の五つの要点」を提唱し、明るく清潔で機能的な住空間を創造しました。1930年代には「現代建築国際会議の主唱者として世界の建築をリードし、いくつもの都市計画案を提示しています。第2次世界大戦後になると、独自の尺度「モデュロール」を発表し、この尺度を用いた集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」や、「ロンシャンの礼拝堂」などの宗教建築などを手掛けました。

『サヴォア邸』

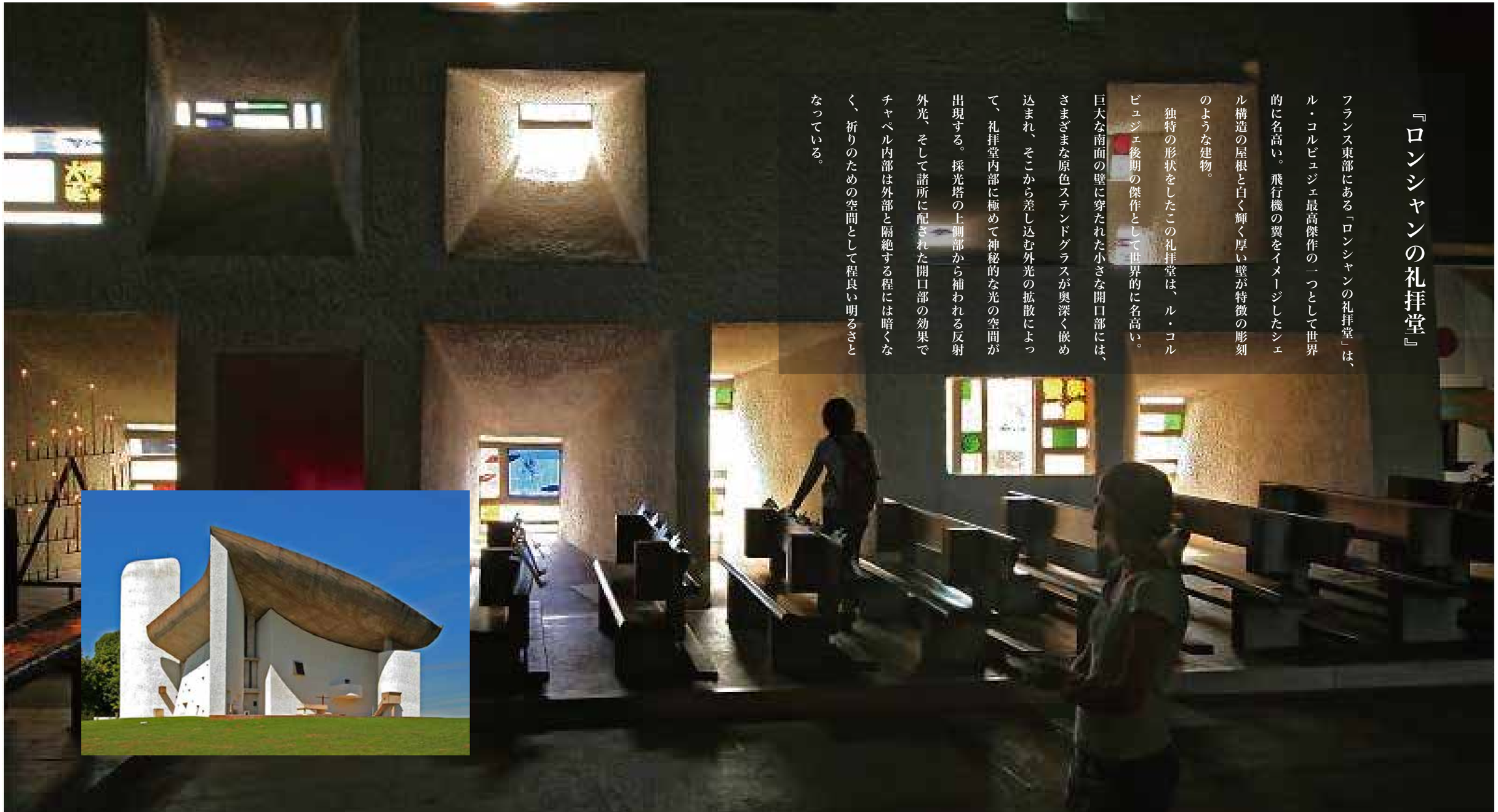
二十世紀の住宅の最高作品の一つであり、フランスの歴史的建築物に指定されている。千九百六十四年、アンドレ・マルロー文化大臣が「サヴォア邸」を民間建築モニュメントに指定し、歴史遺産とした。このサヴォワ邸は、千九百二十七年にル・コルビュジェが表明した「ピロティ」、「屋上庭園」、「自由な設計」、「自由な平面」、そして、「横長の連続窓」という近代建築における五つの原則を探求・実現化した住宅建築である。サヴォア邸では、ピロティ、屋上庭園、自由な平面、独立骨組みによる水平連続窓、自由な立面からなる近代建築の五原則のすべてが、高い完成度で実現されている。平面の中央には緩やかなスロープが設けられ、一階と二階を連続的に繋いでシークエンスを形成している。

リビングは、白とサーモン・ピンクに彩られたこの長方形の空間は、正面に屋上庭園を一望出来る大きなガラス窓、他方には、底辺と平行に施された連続的な長方形の窓々の効力により、外からの柔らかな陽光で満ち足りている。

無駄な装飾の無い室内には、ル・コルビュジェが創作した機能的な椅子「安楽椅子」や、「自由に動く背を持つ椅子」などが置かれており、見学者は自由に腰を落ち着け、ゆったりとした気分で目の前の庭園を楽しむ事が出来る。

屋上庭園(Jardin Suspendu)に出てみよう！天井となる部分がないと、こんなに開放的な気分になるものなのだ！と改めて感じる。この庭園こそが、邸宅内に光をもたらしていると言えよう。

周囲を取り囲む、白い壁に連なる窓枠は、そこから覗く景色を一枚、一枚のフレームの様に見せかける効果を果たしている。



『ロンシャンの礼拝堂』

フランス東部にある「ロンシャンの礼拝堂」は、ル・コルビュジェ最高傑作の一つとして世界的に名高い。飛行機の翼をイメージしたシェル構造の屋根と白く輝く厚い壁が特徴の彫刻のような建物。

独特の形状をしたこの礼拝堂は、ル・コルビュジェ後期の傑作として世界的に名高い。巨大な南面の壁に穿たれた小さな開口部には、さまざまな原色ステンドグラスが奥深く嵌め込まれ、そこから差し込む外光の拡散によって、礼拝堂内部に極めて神秘的な光の空間が出現する。採光塔の上側部から補われる反射外光、そして諸所に配された開口部の効果でチャペル内部は外部と隔絶する程には暗くなく、祈りのための空間として程良い明るさとなっている。

『国立西洋美術館』

千九百五十九年に開館し、緑色の外壁は、近付いてみると、緑色の小石を全面に貼り付けたものであることがわかる。建物の平面は正方形で、各辺に七本ずつのコンクリート打ち放しの円柱が立つ。

一階部分はピロティ構造となっていて、一階の大部分が室内に取り込まれている。一階中央部分は、屋上の明かり取り窓まで吹き抜けとなったホールで、「十九世紀ホール」と命名され、現在はロダンの彫刻の展示場となっている。

国立西洋美術館外観

▲ピロティ

◀19世紀ホール

低い天井自然光

一階から二階へは、彫刻作品を眺めながら上れるように、階段ではなく、傾斜のゆるい斜路が設けられている。

二階は、中央の吹き抜けのホールを囲む回廊状の展示室になっている。これは、ル・コルビュジエの「無限成長建築」というコンセプトに基づくもので、巻貝が成長するように、将来拡張が必要となった際には外側へ、外側へと建物を継ぎ足していける構造になっている。

2階展示室は、内側部分の天井高が低くなっている。この低い天井の上は、自然光を取り入れ、明るさを調整するためのスペースとして設けられている。

▲緩い斜路